



1. 京都市 The Kyoto-City Daimaru Store

実は私、人が多い場所は苦手です。うじゃうじゃと蠢く人々の中にいるだけで眩暈と息苦しさで襲われるほどの重症。だから、デパートに行くなど以外の外。そんなオヤジも小さかった頃はデパートに行くのは楽しみでした。まだ大型量販店どころか、近所にはスーパーマーケットもなく、公設市場があったぐらいの時代のことです。こどもにとって町の中心部にあるデパートは、日常では目にするののできないオモチャ（こどもにとっての宝の山）に触れられる場所で、床に転がって「買って買ってー」の呪文を泣き叫ぶ儀式的場でもありました。そして、なによりも、ちょっと綺麗に盛りつけたお子様ランチを食べられる大食堂がありました。

フードコートなどと言う中途半端でがさつな空間とはわけが違う。ちゃんと水を持ってきてくれる揃いの制服に白いエプロン姿のウエイトレスさんもありました。オモチャは兎も角、今思えば、お子様ランチがなぜあれほど楽しみであったのかと思います。回数にすれば、デパート大食堂のお子様ランチなど、10回も食べていないはずですが。それなのに、今でもなお、その盛りつけや色彩、味や香りまでを思い出すことができるのは不思議です。富士山の円錐台にかたどられたケチャップ色のチキンライス。その上には決まって小さな日の丸が立っていました。透けるほどに薄い紙に印刷された日の丸が、爪楊枝の軸に儚げについているその旗を、宝物のように家まで持って帰ったものです。今はどうも日の丸は分が悪いようで異国の旗が立つことも

ありますが、私の世代には、お子様ランチの旗は断じて日の丸でなければなりません。あの白地に赤い○の色彩が、チキンライスと相調和して、実に魅力を増すのです。こどもにちょうどよい分量つつ、こどものツボを心得た料理をちょこちょこと盛りつけてあるのも嬉しかったのかも知れません。非常に優れたワン・プレートでした。

当時のこどもたちにとってデパートに行くのは、ちょっとした“別世界旅行”だったのです。

小学校も高学年になると、いつの間にか私の世界から百貨店は魅力を失っていきました。百貨店の屋上遊園地や玩具やお子様ランチの魔力が弱まり、高校生になる頃、デパートはもはや無縁の世界となってゆきました。その後、人混みアレルギー（？）の私は、すすんでデパートに出向くと言うことは皆無となっていたのです。

そんな私が、デパートの魅力について、お子様ランチの色彩や味、建物のデザインなどについて想いをめぐらせることになったのは、ぎょっとするような風景を写した一葉の絵葉書をご紹介しようと思ったからです。

冒頭の写真絵葉書は明治44年に起工、大正元年10月に竣工した際、大丸呉服店が配布した宣伝用絵葉書のうちの一葉です。写真は南東方向から北西向きに撮影されています。六角堂の宝珠つき屋根も見えていますね。

それにしても、低い町家が薨を連ねる京都盆地の中に、忽然と聳え立つエキゾチックな建物。一番高い塔からはアザーン（モスクで礼拝の開始を告げる声）が聞こえてきそうな雰囲気です。そもそも一昔前のデパートは、豪華で、わくわくする空間でしたが、このサラセン様式の鉄骨木造3階建て建築は、図抜けてもの凄いですね。私の手元には、当時大丸が発行した案内小冊子があるのですが、その中の「大丸呉服店と其設備」には、「本館の構造は印度サラセニック、スタイルに則とり之に日本固有の建築法を應用したる鐵骨木造建にして高さ地上八十二尺床の總面積一千〇七十六坪三合四勺其屋上に峙立せる塔屋は彼の世界建築上の寶石とも稱せらるゝ印度アグラに於けるタジマホールの塔屋に擬したるものなり入口は都合三カ所あり本館の東南角に面したるものは幅二十四尺の大入口にして此他四條通り高倉角各入口間の大硝子陳列窓は當店の誇とする一にして特にベルジウムより取寄せたものなり又本館の西北角に面し稻荷神社を奉祀せり所謂大丸稻荷にして其前面の庭園はイタリヤ式なり……」と誇らしげに記されています。外観はサラセン様式、屋上にはイタリア式庭園に面して稻荷も祀り、凄まじいまでの和洋折衷ですね。店内各階の案内も和洋古今折衷で最先端のテクノロジーも取り

入っていて面白いのですが、今回は割愛。そのかわり、この建物を正面から捉えた宣伝用写真絵葉書をご紹介します。

四条高倉南東から撮影されたものです（写真2）。



2. 大丸呉服店 京都四條高倉角

説明通りに三力所の入口が見えています。隣接する建物と比較して、その威容は圧倒的です。画面右端に立っているのは当時の市電架線柱です。なんでこんなものまでフレームインしたのかと不思議に思えたのですが、この架線柱が市電の停留所だったのです。「停留場 四條通高倉」という表示が読み取れます。

実は、この写真をもとにイラストに描き起こされた年賀状があります（写真3）。



3. 大丸呉服店年賀状

このイラストにはちょっと気になる点があるのです。電停の表示盤付き架線柱も、自転車の人も母子3人連れも、写真と同じなのですが、写真に写っている2台の大八車（ポニー？ロバ？）に変更されています（写真右両絵葉書部分拡大図）。実際にこんなお伽の国から出て来たような乗り物があったわけでは無いでしょう。大八車で

はモダンさに欠け、なじまないと考えたのでしょうか。また、イラストではショーウィンドウの中の様子も描かれています。

当時京都四条界限にはこのようなエキゾチックな建物がいくつもありました。寺町四条御旅町には洋風三階建ての藤井大丸がありました。三条通りまで含めれば、烏丸・河原町間にはモダンで、当時の感覚では奇抜で洋風デザインの建物がいくつも建っていたのです。

一方、河原町以東の景観変化は少し遅れます。市電路線の東進、道路の拡幅以後には菊水館やレストラン矢尾政（現・東華菜館）などがあらわれることになります。

大丸の年賀葉書は、大正9年に出版されたものですが、その翌年、五山送り火の日の8月16日午前5時、原因不明の火災により焼け落ちてしまいます。同じような箱が建ち並ぶ現在の四条通りのなかに、こんな“異様”な建築があったら、さぞかし魅力的でしょうね。

ところで、大丸百貨店最上階には、この建物のとき、すでに「スライド（滑機）ロッキングボート（床上ボート）メリーゴーラウンド等……皆最近米國より取寄せ」た「児童遊戯室」があり、また、「米國流行のミッション式にして欄間の繪は和蘭陀の風車圖」というインテリアの食堂も備えていたのは注目されます（「」は前出「大丸呉服店と其設備」より）。

令和の時代まで、建物は何度か建て替え、改築されましたが、最上階にはいつも食堂がありました。しかし、その大食堂（ファミリー食堂）も、老朽化を理由に、今年令和4年の2月末、大正元年10月から続くその歴史に幕を下ろしました。その後どうなるのかは、来年春に発表予定だそうです。

当時では考えられないほどに品揃えが充実し、凡そ世界中の商品が、家にいながらにしてネットで購入できる現代から見れば、デパートなんぞで心ときめくなど、あまりに素朴に感じるかも知れません。しかし、一方で私たちは、当時の人々のようにわくわくする空間を、これほど身近に持っているのでしょうか。夢や憧れの空虚さと言う点では、現代の方が昔に勝るでしょう。デパートが別世界だった時代は、もう来ることはないのかもしれませんが。デパートが夢の国だった頃は、今よりいろいろなものが宝物に見えていて、だれでも身近な世界に夢を見られた幸せな時代だったのかもしれない。

さて、わくわくできる場所を、自分で探しにゆくことにしましょうか。残り少ない夢の世界の探索の旅へ。

ひぐち じょう（教授・日本文化史）